

Title	安南訳語の研究(六)
Sub Title	A bibliographical and linguistic study on the "An-nan-yi-yu" (安南訳語) (VI fin.)
Author	陳, 荊和(Chen, Ching-Ho)
Publisher	三田史学会
Publication year	1968
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.41, No.3 (1968. 12) ,p.71(409)- 121(459)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19681200-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

安南訳語の研究 (六)

陳 荊 和

第四章 十六世紀を中心とする越語声母の変遷

第二章及び第三章に於ける訳語の解釈及び音註応用情況の考察により、吾人は更に進んで十六世紀本訳語編成当時の越語の状態を中心として、その前後に於ける越語声母変遷の概況を推考することが出来る。以下個々の声母に就いて私見を述べることにする。

A 舌根音声母

1. c, k, qu- 諸声母

本訳語は c, k, qu- 三つの声母に対しては一律に k- 母の漢字を音註に採用し、その間に於ける音値は完全に合致して居り、中古・近代越語を通じて k- 値を維持して来たと認められる。

2. kh- 声母

近代越語にて kh- 声母を有する語は兩種の異なる音値を有している。一は *khóa* (No. 359) 'khác' (393) 等の如く充分に k- 値を有するものであり、一は否定詞 *không* の如く、kh- 母が殆んど x (h) と異なるものである。本訳

語にて、*kh*-母の語は十例を数えるが、その内音註に *h*-母の漢字を使用するのが二例(各、根)、*k*-母の漢字が六例(空、客、夸、課、渴、恰)、*x*-母の漢字が二例(灰、歛)あり、一般的に云つて十六世紀に於て塞清送氣音の *k*-値は尚健在であり、擦音化(*k*→*x*)の傾向は猶僅少であつたと推察される。

三' *g*, *gh*, *ng*, *ngh*-諸声母

g-及び *gh*-両声母に対して、本訳語は一律に *k*-母の漢字を音註に採用している。これは十六世紀の官話音が既に *g*-声母を喪失したことによる。併し、越語の *gə* (鷄) *gəo* (米)等の語が借語では *ka*, *kaw* となつてゐることから、近代越語の *g*-母は **k*-より派生したものであり、十世紀頃の越語には喉音の有声閉塞音が存在しなかつたと云われてゐる(松本、上引書 p. 233-234)、上述せる如く明代の官話音には *g*-母は最早存在しないのであるから、*k*-母の音註で表わされた語音は果して現今通りの *g*-母であつたか、或は **k*-母であつたか確実に判断するべきがない。唯こゝで唯一の例外と云うべきは No. 304 及び Nos. 400, 413 にて「愛」が音註としてあてられ、前者にて *gəy*、後者にて *gəi* の両音を表わしていることである。按ずるに、「愛」の AC は喉音声母を有する *ai* であり、EEEO の標音方式ではその近代音を *ngai* と表記している。而らば、「愛」によつて表明される音は *k*-母よりも *g*-母を有する語であつたと思われるから、本訳語編成当時 *g*-母は既に存したと見ねばならぬ。この事は以下の諸例によつても類推することが出来る。

ng-及び *ngi*-両母の越語に対して、本訳語があてた音註は *k*-母の漢字 (No. 589 欽) 以外に次の三種類の音註が認められる。

- (1) 昂、岸、牙、雅、月、兀、我、歪、
- (2) 靄、安、哀、厄、委、惡、烟、印、

(3) 物、欲、

これらの漢字は近代官話音では声母喪失の傾向が強いけれども、時には輔音を有したり、有しなかったりする。輔音を有する時は喉塞音の？であつたり、舌根濁擦音のㄞであつたりする。(董、上引書、p. 11)。その古音に至つては、(1)の諸字は舌根鼻音の *ng-* (*n̄*) を有して居り、又(2)の諸字は喉音声母(カールグレンは・で、現代中国の音韻学者は・で表わす)を有して居る。又羅常培氏の考察によれば、明末、利瑪竇 (Matteo Ricci, 1552-1610) は曾つて *ng-* を以て「礙」、「我」、「愛」、「闇」の諸音を表記している(耶穌会士在音韻学上の貢献、歴史語言研究所專刊第一本、p. 292)。斯く見ると、本訳語が「愛」(AC :*ai*)で以て舌根濁音の *gây, gài* を、又上掲の(1)(2)両行の漢字で鼻音の *ng-* (*n̄*)、*ng̃h-* (*n̄*) を表わすのは極めて自然な妥当な方法であると共に、十六世紀の官話音に尚も濃厚な舌根鼻音或は喉音声母が存したことをも証するものであらう。

惟、上述の範疇に属しない音註として、第三行の「物」(AC *m̄*uet)と「欲」(AC *i*ˈok)があるが、両字ともに入声音であり、夫々越語の入声音たる *nguyêt* (月のSV)と *ngọc* (玉のSV)を表記している。この二例は声母の類似よりも、韻母の類似に基き、音註として採用されたのであらう。

四、*h-* 声母

本訳語にて *h-* 母を有する語は二十七例を数えるが、その内二十五例までが *x-* 母の漢字を音註となしているので、十六世紀に於ける *h-* 母の音値は確立したと見るべきである。例外として、Nos. 419, 532 にて「巫」(*u*)が *hu* (虚のSV)を表わして居り、又 No. 134 には「嫁」(*ka*)が *hà* (夏のSV)の音註となつてゐる。前者は韻母の類似による註音であり、後者は「夏」のSVが十六世紀當時尚“*khà*”であつて、擦音化(→*h*, *x*)していないことを証するものである。

B 舌面音声母

1. ch- 声母

近代越語の ch- (音値 čy-) 母は tr- 母に比較すると、其の完成の年代は割合早いようである。この声母は Dict. の中では c, ci (意大利語の c と同値) で表わされて居り、十七世紀から十九世紀の間に、その音値は čy-čy- の如き変遷があつたことが推察される。按ずるに越語の ch- 母ははゞ泰諸語及び猛吉 (Mon-Kkmer) 語の顎音声母に合致し、泰諸語の顎音声母 (č, j の如き) は *kl- (kr-), *gl- (gr-) 等の複合声母に由来し、猛吉語の č, j- 両母は又 *ks-, *ky-, gs-, gy- 等の複合声母から出て居り、越語中の č 母は漢語 č, j, ts- 諸母の転化したものであり (松本、上引書、p. 234)、越語の tr- (ts-) 母又屢々 ch- (č) 母に転じている。この様に ch- 母の来源は頗る多様であるが、本訳語では ch- 母の語に対して一律に tš- (ts-), tš' (ts'-), ts- 諸母の漢字を音註となしている。唯一の例外は No. 578 の「酸—多—chua」にて音註に t- 母の漢字 (多) を採用している。かゝる現象は本訳語編成当時 ch- (č, č) の音値が既に確立し、且つ泰、猛吉諸語の流音を伴う複合声母が完全に顎音化したことを証するものである。

二. nh- 声母

本訳語で nh- (n-) に対する音註は「紐」、「納」二字の外、「由」、「言」、「雅」、「押」、「哀」、「牙」、「易」諸字の如き声母を欠く字をあてている。按ずるに十六世紀当時の官話音には既に n- 母が存しないので、越語の nh- 母を精確に表現することが出来ず、かくて n- 母の字 (紐、納)、古音に ng- 母を有する字 (言、雅、牙)、或は古音に喉音を有する字 (押、哀) を音註に起用して、近似音を表わさんとしたのであろう。只一個処だけ、No. 119 にて nham (壬の SV) に対する音註として ɲ- (ɲ-) 母の漢字 (忍) があてられているが、これは「忍」の AC が ɲien' 温州音が nhang' 上

海音が *nhiang* であつて、音韻的に接近していることによるものである。

C 舌尖音声母

一、*d*・声母

近代越語の *d*・(*ḍ*) 母は大体猛吉語、泰諸方言及び侬語の *t*・*d*・両母に合致し、越語の *d*・母も古代漢語の *t*・*d*・両母に相当して居り、その成立の年代に就ては Maspero は曾つて紀元十世紀(即ち越語成立時期)以前であると推考した(Maspero, loc. cit., p. 32-34)。今本訳語に見えている *d*・母の語から猛吉語、泰語及び侬語と親縁関係を有する可成りの語例を挙げることが出来る。例えば、

	(語義)	(音註)	(越語)	(字喃)
No. 53	地	得 (<i>tei</i>)	<i>dât</i>	坦
No. 64	土	得	<i>dât</i>	坦

越語で「地」「土」に当る語はひとしく *dât* であるが、猛吉語は *tî* Bahnar 語は *teh* Stiang 語は *teh* Khmer 語は *diy* であり、侬語諸方言の内、北部地方は *to't*, 南部地方は *to't*, *tút* とする。

No. 104	夜	顛 (<i>tiên</i>)	<i>dēm</i>	店
---------	---	-------------------	------------	---

侬語諸方言の中、北部方言は *tēm*, 中部方言は *dēm*, *hôm*, *tēm* で、南部方言は *tēm* である。

No. 443	去	低 (<i>ti</i>)	<i>di</i>	埝
---------	---	-----------------	-----------	---

侬語諸方言は一律に *ti* である。

No. 30	紅	鐸 (<i>to</i>)	<i>dò</i>	赭
--------	---	-----------------	-----------	---

侬語諸方言の内、北部は to, 中部は to, do, 南部は to, toh である。

No. 617 餓 対 (tuei) doi 飼

侬語諸方言の内、北部は tol, 中部は toy, don, 南部は tul, toy である。

No. 646 倒 対 do 堵

白夕語は tau, Diao 語は tao である。

これらの語例は何れも越語の d-母と泰、侬語の t, d-母間の同源関係を証明するものであるが、併し泰侬諸語の t-母が越語の d-母に転化した年代に関しては、上掲諸語例の音註は吾人に的確な判断の材料を供給することは出来ない。本訳語にて d-母の語は全部で三十一例あるが、その内 t-母の漢字を音註に採用したのが二十五例、t-母が三例、l-母が二例、s-母が一例ある。これは要するに明代官話音には既に t, d-両母の別がなくなっている（つまり塞濁音の d-母が喪失している）ので、訳語の編者は t- (t'), l-等の声母の漢字を以て越語の d-母を表わしたのである。かゝる註音の方法からみると、十六世紀当時 (thai, nuong) t → (vietnamien) d-の過程が完成したかどうか判断することが出来ない。併し d-母の諸語の字喃を見ると、

(語例)	(越語)	(字喃)	(仮借字の SV)	(声符の SV)
Nos. 53, 64	dât	坦	dân	
No. 57	đường	唐	đường	
No. 58	đá	砢		đa (多)
No. 104	đem	店	diêm	
No. 275	đuôi	魑		đôi (堆)

No. 443

đi

侈

đa (多)

No. 617

đoi

樹

đôi (対)

と云う風に、何れも字喃の仮借字又は形声字の声符に đ- 母の越読を採用している。このことは字喃成立の年代たる十三世紀頃から越語の đ- 母は既に大凡成立したことを証するものであろう。

更に No. 31. 黒—忍 (gien) —đen の例に就ては、舌尖擦濁音の ʒ- (ʒ-) 母の漢字で以て舌尖塞濁音の đ- 母の越語を表わして居り、双方の音韻関係は的確に合致するとは云えないが、双方共に舌尖後音たることに基いた註音であらう。本例の đen に対して諸本は「忍」をあててゐるが、玄本は đ- 母の「端」を音註となしていることは注意する要があらう。

二、tr- 声母

近代越語の s- (s-) 母が *l- 母の形に由来しているのに反して (s- 母の項参照)、tr- (音値 ts-) 母は k, p, t 等の古前添詞 (プレフィクス) と l- 母の結合 (仮りに *l- 母と表明しておく) より出でている。Maspero は曾て越語・猛吉語及び佉語方言の相互比較によつて上述の現象を詳しく説明している (Maspero, loc. cit., p. 82-83)。要するに tr- 母転化の情況は *l- 母の演変に比べると自ら異つた別の変遷過程を経て来たものである。按ずるに、近代越語の tr- 母は一般に中古越語の tl- 複合声母 (t は前添詞) に合致している。更に Alexandre de Rhodes の Dict. に依ると、中古越語 (十七世紀) の内で、t- 前添詞以外に、更に専ら l- 母と結合する b, m- 両種の前添詞の存する事が認められる。佉語にも kl-, pl-, tl- の三種の複合声母があり、これより越語は佉語との分離以前に k, b (p), t, m 等の前添詞をもつていたと推察されるが、その機能に就ては未だに知られていない (松本、上引書、p. 236)。いづれにせよ、かゝる現象は越語声韻組織の主要なる特徴であり、泰諸語共有の現象でもあり、且つ Maspero が越語を泰語系統に帰属せしめる有力な証拠の一つでもある。聞有氏は曾てかゝる現象に基いて、漢字諧声中に含まれる複合輔音 (初子音) の現象を

推論している。(聞有、論字喃之組織及其与漢字之関涉、燕京学報、第十四期、p. 201-239)。然しながらこゝで注意すべき事は中古越語の *t*-前添詞は一面又猛吉語及び泰語の *k*- (或は *g*-) 前添詞に相應し、かくして前者は後者より生起したものならんと推考出来ることである。更に *k*-前添詞が *t*-前添詞に転化した年代に就ては、Maspero はこれを原始越語の初期まで遡らせ得るとなしている (Maspero, loc. cit., p. 79)。要するに、近代越語の *ti*-が成立するまでには (猛吉語 泰語) **ki*- (中古越語) *ti*- (近代越語) *ti*-の変遷過程を経ているのである。

本訳語には近代越語で *ti*-母をとる語は全部で二十二例見えているが、其中の約半分(十例)の語例は何れも *i*-母の漢字を音註に採用している。

	(語義)	(音註)	(中古越語)	(近代越語)	(字喃)
No. 1	天	雷	blòi	tròi	歪
No. 20	上	連	tiên	trên	連(上)
No. 37	円	鸞	tiền	tròn	論
No. 72	前	勒	tiước	trước	畧
No. 78	清	竜	tiông	trong	冲
No. 103	中	弄	tiông	trong	中(冲)
No. 217	檳榔(きんま)	萋	tiâu	trầu	萋
No. 227	児(棗児)	頼	blài	trài	𦵏
No. 413	(男孩)	来	blai	trai	𦵏
No. 656	百	欄	tlàm	trăm	𦵏

上掲の諸例にて音註は悉く 1 母の漢字を採用しているのみならず、字喃も殆どが 1 母の漢字（連、論、畧、蔓、吏、来、林）を声符又は仮借字として採用している。これにより、これらの声符又は音註が表明する音は中古越語 *ti* 及び *bi* 複合声母中の 1 母に外ならないことがわかる。かく見ると、訳語の編者は 1 と結合した古複合声母の *b* 前添詞や 1 前添詞には注意を払わなかつたように思われるが、事實はそうでもない。例えば No. 1 の「天」に対しては玄本も其他の六本も均しく「雷」を音註として **bi* 1 *i* を表明しているが、No. 669 の「天青」に対しては、諸本は「雷蒼」をあててのに対して、玄本は「北蒼」とあてている。これは明らかに「北」(*pei*) を以て **bi* 1 *i* を表わしたものであり、充分に *b* 前添詞の存在を意識した結果である。又 No. 328 の「上梁」及び No. 661 の「上表」に対して諸本は夫々「連省」(*ti* 1 *en* / *len* *su* 1 *on*)、**「連表」** (*ti* 1 *en* / *len* *bi* 1 *eu*) を音註となしているが、独り玄本は「登整」と「登表」を夫々あてている。「登」(*ten*) の応用は明らかに *ti* 複合声符に含まれる 1 前添詞の存在に注目した証拠である。又次の二例にて、

	(語義)	(音註)	(中古越語)	(近代越語)	(字喃)
No. 94	菓	捫 (<i>pai</i>)	<i>blai</i>	<i>trai</i>	𣎵 (𣎵)
No. 480	還	達 (<i>ta</i>)	<i>tlà</i>	<i>trà</i>	𣎵

「捫」と「達」の二字は均しく中古音の *blai* と *tlà* を表わすと思われるが、注意すべきは字喃が 1 母の漢字（吏、呂）を声符又は仮借字としてその複合声母中の 1 母を強調せんとするのに対して、本訳語は「捫」と「達」の採用により特にその前添詞の *p*, *t* に注音の重点を置いたことである。要するに官話音には複合声母が存しないので。単一声母の漢字で越語の複合声母を表明する場合どうしても最初の前添詞か又は第二位の 1 母かどつちかを訳すると云う結果になる。而して中古越語の前添詞は語によつて *b*, *m*, *t* の区別があるが、1 母の方はどの語でも固定して存するので、勢い

「母の註音に重点がおかれたのであろう。

以上の諸例により、本訳語編成当時 *ti*、*bi* の二種の複合声母は既に完全な形に到達し、且つ **kli-+ti* の転化過程も既に完了したことを推測し得るが、しかし次に挙げる三例を合せて考慮すると、かゝる見解は又修正の必要があると思われる。

	(語義)	(音註)	(越語)	(字喃)
No. 248	(水牛)	𪗇 (<i>k'iu</i>)	<i>*klâu</i> (▷ <i>trâu</i>)	𪗇 (𪗇)
No. 332	鼓	𪗇 (<i>ku</i>)	<i>*klông</i> (▷ <i>tông</i>)	𪗇
No. 473	儻	𪗇 (<i>kan</i>)	<i>*klôm</i> (▷ <i>trôm</i>)	𪗇

近代越語で「水牛」を指す語は *trâu*、中古越語は *tiâu* であり、字喃の声符は「婁」に従う。この語の侬諸方言に於ける対応語は *tsu*, *tsâu*, *tu* 諸形以外に、*Thach-bi*, *Myson* 及び *Hung* 諸地方では *klu*, *Uy-lo* 地方では *krau* と称している。かゝる語例より見ると、「𪗇」は侬越語両語共通の古語 **klâu* (玄本以外の六本の「革婁」(*ke lou*)) もこの音を表わすと見てよい) を表わすものと見ねばならぬ。当然この語は越侬両語が分離する以前の時代まで遡ると見ねばならぬ。次に「鼓」のことは近代越語で *trông* と称する。この語の侬諸方言に於ける形態に就ては吾人は勘考すべき材料を欠くが、しかしその字喃の声符は「弄」(*lu*) であり、加ふるにこの語と形態の近似する *trong* (清浄な) は侬語諸方言で、*tsôn*, *tlon* の形以外に、*Thach-bi* では *klong* 又は *kloang*, *Uy-lo* では *klàng* であることから、「鼓」の義の *trông* も、その古形は **klông* なるべく、「共」はこの音を表わしたのに外ならないと思われる。次に第三例に就て考えるに、近代越語で「儻」、「盗む」に当る語は *trôm* であり、字喃の声符は「監」(*kiam*) に従う。この語の侬語諸方言に於ける対応語は *tsôm*, *lôm* 両形以外に、*Thai-thinh* では *tlôm*, *Mison* では *hôm* (*Maspero, loc. cit.*,

p. 102, 附表)となつて居り、その古形は *klóm (hóm は其の送気音であろう) であり、「幹」はその音を表わしたのである。(註一)

以上の考察により、*kl- 複合声母が tl- に転化した過程、換言すれば、*k- 前添詞が t- 前添詞に転化した過程は原始越語の時期に於て未完了であつたのみならず、本訳語編成の時代に於てさえも未完了であつたことが察知せられる。上掲の語例が示す如く、*kl- 複合声母は十六世紀當時に於てその数こそ少いが確実に残存しているのであつて、かくて *kl-→tl- の転化は十七世紀から十九世紀に至る間に tl-→tr- (ts-) の転化現象と並行して完成されたと見ねばならぬ。

三、s- 声母

現行の「国語字」(chữ quốc-ngữ) が s- で表明する音は一つの捲舌擦音の声母であつて、その音値は殆ど s- に等しい。今越語の s- 母を猛吉語、佉語諸方言と比較すると、s- 母は猛吉、泰諸語の古前添詞 k, p, t と流音声母の r- との結合より生じたことが認められる。若しこれらの古前添詞を *r- で代表させると、其間に *r- / s- の関係が存することが知られる。Maspero はこの変遷過程に就て委しく考証を加えたが (Maspero, loc. cit., p. 82-84) 其の論考する所によると、次の諸例にて、

No. 4	星	抄	sao
No. 61	江	生	sông
No. 73	後	稍	sau
No. 153	六	哨	sáu
No. 190	蓮	山	sen
No. 311	窓	(各)朔	(cua) só

No. 313	梁	省	suon
No. 509	力	十	suc
No. 623	鉄	殺	sât

何れも $\text{ś} (\text{s}^-), \text{s} (\text{s}^-), \text{tś} (\text{tś}^-)$ 声母の漢字を音註となしているので * ll-rôŋ の転化の過程は本訳語編成当時 (Maspero に依れば紀元十五世紀) には既に完了したと解している。(註二) 然し管見によると、Maspero のかゝる見解は尚検討を要するようである。

筆者は先ず本訳語にて「河川」に関する語として次の両例があることに注目したい。

Nos. 61, 83, 84	江	^(音註) 生 (ŋaŋ)
Nos. 56, 85-88	河	空 (k'ud)

按ずるに近代越語で「河川」を指す語は sông 一語しかない。この語は当然 Nos. 61, 83, 84 の「生」の対音である。所が Nos. 56, 85-88 の「空」に対して、近代越語では適宜な対応語を見付出すことが出来ない。Maspero の考証による $\text{ś} \text{ sông}$ は * ll-rôŋ の形より出たものであり、これに相当する語は猛語では krong , Bahnar 語では krong , Rangas 語では kron , cham 語では kraung となっている。ラオス語は không , 泰語は khlong , 緬甸語は khyin (* khlon), 佯語諸方言では k'ôn , k'lon , kson となっている。(* krong 一連の語に関する考察は拙著、哀牢夷九隆伝説の探討、民族学研究、卷十七、三一四号参照)。かゝる語例より見て、「空」は明らかに krong , k'ông 一連の語を表わし、「空」の k^- 声母が表明する音は krong , k'ông に含まれる kr^- 又は k^- 声母を表わすものに外ならない。次に sông の字喃は「瀧」であり、「龍」(竜)を声符となして居り、その l^- 母は当然 krong 一連の語の r^- 母を指すものである。亥本は No. 56 の「河」に対しては音註として同じく「空」を充てるが No. 61 の「江」に対しては「生」、

「空」の双方をあて、Nos. 83, 84 では「龍」をあてている。これは十六世紀に於て「河」、「江」を指す語として *sông*, *không*, *krông* の三つの語形が通用した証拠に外ならず、**kr-* が *kh-* を経て *s-* 化した過程をも証するものであろう。本訳語にてこれと同様な例は更に見出すことが出来る。Nos. 76, 85 両例は「蔓」(*liu*) を以て「深」に対する越語の音註となしている。近代越語で「深」を指す語は *sâu* であり、その字喃は「𣵛」で、蔓を声符としている。一方岱語諸方言にて *sau* に相当する語は *Thach-bi* と *ksâu*, *Mi-son* と *k'âu*, *Uy-lo* と *kru*, *Hung* と *khlu* となつて居り、*sâu* の古形は **krâu* であつたと推考され、本訳語で採用した音註の「蔓」は当然 **krâu* 語中の *r* 母を表わすことが知られる。又 No. 469 にて本訳語は「牌」(*p'ai*) を以て「酔」に相当する越語の音註となしている。近代越語で「酔」を指す語は *say* であるが、この語は岱語方言の内、*Mi-son*, *Ha-suu* 両地では *k'ai*, *Lang-lo*, *Lam-la* 両地では *sai*, *Thai-thinh* では *p'ai*, *Uy-lo* では *prai*, *Hung* では *pli* となつて居り、これによりその古形は **prai* (或は *p'ai*) であつたことが知られる。「牌」が音註となつてゐることは其の明証と云わねばならぬ。

かゝる現象に関しては本訳語の七種の伝本の内、特に玄本は種々興味のある材料を提供してくれている。例えば、No. 138 の「後日」、No. 145 の「後年」に対して諸本は夫々「稍靄」、「稍難」を充つて *ngày sau*, *năm sau* と読ませているが、玄本は「考靄」、「考難」を充つて、*sau* の古形 **krâu* (>*k'au*) を表示して居り、Nos. 153, 167, 681 の「六」に対して諸本は一律に「哨」を充てて数詞 *sáu* を表わしているが、玄本は何れの例にても「包」(*pau*) をあて、明らかに **prau* (>*p'au*) なる古語の存したことを証している。又 No. 599 の「生肉」に対して諸本は「僧席」をあて、**sit* (>*thit*) *sông* とよませるが、玄本は「席空」を音註としている。この「空」も明らかに *sông* の古形たる *krông* (>*k'ông*) の存在を物語るものであろう。

上掲の諸例に依つて見るに、**li-r* が *s-* (*s-*) に転化する過程は本訳語の編成当時尚未完成であつたと云わねばならず、

それ故にこの種の転化過程は十五、六世紀当時には尚進行中であり、近代越語になつてから完結したと考えねばならない。

四、d-声母

Maspero の研究によると、古代漢語の所謂「喻」韻は越読の中で大部份が d-母に転じているとのことである。所が近代越語に於ける d-母には三つの音値があり、北圻では ʒ (ʒ), 北安南 (河静) では dʒ, 南圻では ʒ となつて居る。この現象は現今に至るも「喻」韻の ʒ (ʒ) 化が全面的に完了しないことを証するものである。

次に d-母の来源に就いて云えば、この声母が佉語若干の方言及泰語間の ʒ 母と対応することにより、原始越語の ʒ 母より出たものと推考することが出来る。南圻及び中圻にて d-母が尚明瞭な ʒ 値を維持することはその明証でなければならぬ。Maspero は上引論文にて次の諸例を引き、

No. 130	西	幼 (yeou)	dâu (SV)
No. 260	燕	暗 (yen)	diên (SV)
No. 318	衙門	押悶 (ya-men)	da-môn (SV)
No. 572	油	有 (yeou)	dâu (SV)

(音註の標音及び越語の部份は何れも原文に据る。筆者は No. 260 で「安」を音註に採用して yén と解し、No. 318 では nha môn と解する)。これらの語例にて、「幼」、「暗」、「押」、「有」等の音註はいづれも y 母の語であり、且つ d 母の越読を表わすことにより、北圻越語にて y-母が ʒ 母に転じた現象は訳語編成当時 (Maspero によれば十五世紀) には未だに生起せず、十七世紀に至つて Alexandre de Rhodes の Dict. には既に d-母の ʒ 値を確認するが故に d-母成立の時期は十五世紀から十七世紀の間であるとした (Maspero, loc. cit., p 69-70)。

Maspero のかゝる推論は一応肯けるが、本訳語に含まれる他の語例をも網羅して推考すると、上述の推論は修正を加

えられなくてはならないことがわかる。Maspero が挙げた如き語例は更に次の三例が挙げられるが、

No. 32, 177, 431	長	倭(委) (uei)	*yài (dài)
No. 558	洋	揚 (iaŋ)	duəŋ (SV)
No. 658	名	閔(閔) (ien)	danh (SV)

更に注意すべきは本訳語にて *t*-母の語に対して、*ts*-母の漢字・・滋 (199.220), 躋 (425) *tʃ* (*ts*) 母の漢字・・職 (379) 中 (512) も音註として使用される外に、次の二例の如く擦濁音 *ʃ*-母の漢字も音註にあてられていることである。

No. 123	寅	仍 (ʃieŋ)	dân (SV)
No. 322	簪	然 (ʃien)	diəm (SV)

この事は充分に訳語編成当時、*y-i-d* (3) の転化が既に部份的に進行している事実を証するものである。

併し本訳語所載の *t*-母の語例には次の如く特に吾人の注意に値する諸例がある。

(字喃)

Nos. 21, 71	下	得 (tei)	duói	𢵏
No. 204	桑	都 (tu)	dâu	柚
No. 372	繩	歹 (tai)	dây	縷
No. 497	腹	達 (ta)	dà	腋
No. 498	皮	達 (ta)	da	膠
No. 249	羊	得 (tei)	dê	羝

今上掲諸例の字喃を見るに、夫々符声として帶 (SV *dai*)、由 (SV *do*)、夷 (SV *di*)、夜 (SV *dà*)、多 (SV *da*) 及

び氏 (SV *dé*) が使用され、音註は一律に *t*-母の漢字が充てられている。字喃形声字の形成に当つて、声符の音値は一般に越読音に従っているので、*dau* (柚)、*dây* (縷)、*dà* (腋) の諸例は字喃の成立した時代 (即ち安南訳語より以前又は同時代) これらの諸語が既に *n*-値を有したことを物語るが、*duoi* (鄒)、*da* (膠)、*dé* (羝) の三例は共に声符に不送気捲舌塞濁音 (*cacuminal* occlusive sonore non aspiré) の *d* (*d*) を採用して居り、これらの語が異なる来源を有することを証している。

更に近代越語の *d*-母が佬語諸方言の *t*-母に対応する例が可成り存することを注意する要がある。例えば越語 *dâm* (敢てする) に対して佬語諸方言は *yam*, *d'âm*, *t'âm* 及び *tam* の諸形を以て相応じ、又越語 *dé* (容易い) に対して佬語諸方言は *ye*, *d'ye*, *té* と応じている。(Maspero, loc. cit., p. 102 附表参照)。かく見てくると、上掲諸例の「得」、「達」は未だに *d*-に転化しない **t*-母を表わすこと明らかである。上述の考察を総合すると、近代北圻越語の *d* (*n*) 母には二通りの来源があることが知られる。一は *y-d* の転化を経たものであり、一は *t-d* の転化過程によるものである。両種の転化現象は本訳語編成の時代には尚進行中であるが、十七世紀の中頃には既に完了を見たのである。(註三)

五、*t*-声母

漢語の舌尖齒音諸声母 (即ち **s*, **z*, **ts*, **dz*) が越読の中では完全に混同して一律に舌尖清塞音の *t*-母に転じていることは早くから知られた事実であるが、かゝる現象は一般の越俗語音にても認められる。今実例に就て述べるに、原始越語の舌尖齒音声母 **s*-は現今の佬語の東・南部方言にては相変らず存在し、且つその一部を顎音化して *s*, *n* に転じ、若干語例に於ては猛吉語或は泰語の舌齒音に合致し、又近代越語にては不送気舌齒塞音の *t*-母に転じている。かゝる情況は近代越語の *tâm* (数詞八)、*tay* (手)、*tiên* (錢) 三語と泰佬語語間の關聯を見れば容易く瞭解出来る。*tâm* は佬語諸方言の内、*Thach-bi*, *Mi-son*, *Nho-quan* 及び *tâm* であるが、*Lam-là*, *Ha-suu*, *Uy-lo*, *Thai-thinh*, *Hung* 諸地

方では sam であり、その字喃は「𣵛」で、声符は「𣵛」に从む。tay は Thach-bi, Mi-son, Nho-quan では tai, 但 Ngoc-lac, Nhu-xuan, Lam-la, Lang Lo, Thai-thinh では sai, Uy-lo, Hung では si となつて居る、字喃は「𣵛」で、「西」を声符となつて居る。又 tien (錢の SV) は暹語では sien, 老撾語では sien, Ahom 語では sin, Shan 語では sên, 黒歹 (Tai-noir) 語では sien である。かゝる現象は均しく原始越語には確実に s- 母が存したこと、一方では又越語の *s- 母が既に t- 母に転じた事実をも証するものである。

次に *s-→t- の転化発生の年代に就ては、Maspero は曾て本訳語で t- 母の語が殆ど古代 *s- 母の語に合致し、一面又「省」、「醒」、「歳」、「心」等の s- (又は s-) 母の漢語が泰、佬方言では依然として原来の音値を保有するのに反して、越読にては t- 母に転じている事実に鑑み、*s- 母が t- 母に転化した過程は十世紀 (即ち越読成立の時期) に生起して、十五世紀には既に完了したと断定した (Maspero, loc. cit., p. 45; 松本、上引書、p. 235)。今本訳語の実例に就て考えるに、本訳語は近代越語で s- 母を有する越語に対しては殆ど s- 又は s- 母の漢字を音註にあて、近代越語で t- 母を有する越語及び越読に対しては大多数が t- (又は t-) 母の漢字を音註に採用しているが、t- 母の越読音に対しては ts- (ts'), tʃ- (tʃ') 両母の漢字を音註となす例も見受けられる。(註) これらの例より判断するに、本訳語編成當時に於て *s-→t- の転化は既に大体完了したと云わねばならない。たゞ一つの特殊な例として Nos. 155, 169, 683 諸例の「八」(数詞) に対して諸本は均しく「𣵛」(Sam) を音註にあてて、これで *sâm (>tâm) を表わすと解せられるが、そうすると、これは本訳語編成の時代に古代の *s- が未だに t- に転化しない例と目される。然し上述の諸例にて、玄本は音註として「旦」(tan) をあてている点を合せ考えると、當時に於て *sâm のみならず、tâm も存在したわけであつて、*s-→t- の過程が十五、六世紀に完了したと云う推論は依然として成立つわけである。

六、th- 声母

古代越語の舌面清擦音 s は近代越語では一少部份が s (QN s)、 s (QN x)両母に転化する以外、大多数は送気舌尖清塞音の t (QN th)となつてゐる。Maspero は曾つて本訳語で Nos. 506, 570, 599, 600, 619 諸例の「肉―席」を注意して、これらの例にて音註が「席」(si)であることにより、近代越語で「肉」を指す語の $thit$ は訳語編成当時は $*sit$ であつて、擦音声母の $*s$ を保存して居り、かくて s が t に転化する現象は本訳語編成当時には未だに完了せず、十七世紀に至つて始めて完了したと考えた (Maspero, loc. cit., p. 49-50)。按ずるに、かくる語例は本訳語では極めて明顯な現象に属し、筆者は更に次の如き諸例を挙げることが出来る。

	(語義)	(音註)	(近代越語又はSV)	(字喃)	(古音)
No. 38	缺	少 (Siau)	thieu (SV)		$*siêu$
Nos. 63, 97, 98	城	省 (Sia)	thành (SV)		$*sành$
No. 415	少 (人)	(委)小 (siau)	thieu (SV)		$*siêu$
Nos. 426-430	匠	署 (Jiu)	thọ	署	$*sọ$
No. 542	紗	些 (sie)	the	縑	$*se$
No. 602	焼	烧 (siau)	thieu (SV)		$*siêu$
No. 626	石	食 (si)	thach (SV)		$*sách$
Nos. 650, 653-655	書	思 (si)	tho'	書	$*so'$
No. 704	稀	些 (sie)	thua	疏	$*sua$

Maspero は上掲の諸例の内、「肉」(No. 506, $thit$)、「匠」(No. 426, $thọ$)、紗 (No. 542, the)諸語の字喃がそれぞれ「舌」、「署」、「施」を声符となしている事に鑑み、その三語の古音は $*sit$, $*so$, $séw$ であると推考し、又 L. Cadière

神父の研究によると北圻方言の t- (QN th-) 母は中圻北部では s- (QN s-) 母となり、例えば北圻の thə は広治地方では sə となつてゐることである (Maspero, loc. cit., p. 50 及び同頁 N. 2)。更に筆者の調査によれば、次の諸例の如く越読音で th- 母を維持しながら、俗語音で s- (s) 又は x- (s) を取る語が可成り存している。

	(越読音)	(俗音)
庁	thinh	sành
燦	thán	sán (xán)
套	tháo	sáo
跛	thi	sì (xi)
燒	thiêu	siêu
篡	thoán	soán
趨	thu	xu
餉	thưóng	suóng

上掲の諸例は何れも本訳語の編修当時 s- t- の転化は越俗語に於てのみならず、越読に於てすらも未完了であり、近代越語に於ても尚進行中であることを証している。

本訳語に於ては、近代越語で th- 母をとる語例は全部で二十六例あるが、その内で、t- 母の漢字を音註となすのが八例、t- 母の漢字が四例、更に ts-, ts-, ts-, ts- 諸母の漢字が次の如く七例を算える。

(A)	No. 125	辰	忱 (tʃiem)	thân (SV)
	No. 129	申	珍 (tʃian)	thân (SV)

No. 135	秋	初 (tʃ'u)	thu (SV)
No. 325	倉	聰 (ts'ung)	thuong (SV)
No. 397	嬌	整 (tʃiaŋ)	thím (SV)
No. 591	剩	成 (tʃ'ieŋ)	thăng (SV)
No. 675	葱	總 (tsung)	thông (SV)

一方 th- 母の越読に対して t- (t-) 母の音註が充てられた例は

(B) No. 255	兎	托 (t'uo)	thỏ (SV)
No. 308	庁	聽 (t'ieŋ)	thính (SV)
No. 389	通	統 (t'ung)	thông (SV)
No. 512	太	太 (t'ai)	thái (SV)
No. 581	湯	貧 (t'am)	thang (SV)
Nos. 610, 711	麓	多 (tuo)	thô (SV)

の六例を挙げることが出来る。今(A)(B)両表を対比して考察すると、両表とも越読音でありながら、(B)表の音註はその表現せんとする越読音が充分に th- (t-) の音値を取ることを示すのに反して、(A)表は越読音にて、ts'- (ts-), tʃ'- (tʃ-) 等の漢語の声母が越読音 t- 母に転化する過程が未だに完了せざることを証している。而してかゝる現象は前節 (t- 声母の項) の *s, *z, *ts, *dz が t- 母に転化する過程にはるかに遅れると云わねばならない。

七、n- 声母

本訳語で n- 母の語は二十例あるが、その内十八例までが n 母の漢字を音註としている。その他の二例は

No. 236

(花)開

(花)兀

nò.

No. 703

重

讓

nàng

であるが、No. 236 の「兀」の AC は *nguet* であり、*nò.* の対音となることは可能であり、又 No. 703 の「讓」の EM は *siab* であるが MM は *niang* であるので、*nàng* の音註となる条件は具はつている。要するに本訳語編成当時 *ɲ*-母は全く固定して居り、又一方漢語の *ɲ*-母も越読では音値を変えることなくそのまゝ通用している。

八、ɲ-声母

越読音の中には未曾つて流音の *ɲ*-母が存在したことなく、この声母は古代越語では存するも、近代越語では南圻方言が尚その流音の音値を保留するのみで、中圻北部と北圻では *d*、*gi*-両母と混同して一律に *n* の音値に転化している。又周辺諸語との関係を見るに、越語の *ɲ*-母は泰語及猛吉語の *ɲ*-母に対応し、若干例では泰諸語の *ɲ*-母に合致し、又若干例では佉語の *s*-母に相応じている。更に *ɲ*-母の成立過程を見るに、Maspero は本訳語の「No. 503 一牙一生」の例を引き、この例で「生」(*Seɲ*)を以て「牙」(*Qŋ rəŋ*)の音註となす事実に基づいて、*ɲ*-母成立の時期は訳語編成 (Maspero は十五世紀となす) 当時から以後の近代であるとなした。^(註五) 今本訳語の実例に就て見るに、*ɲ*-母の語に対して、No. 270 は「頼」、No. 708 は「弄」と云う風に *ɲ*-声母の漢字を音註となすのが二ヶ处あり、これにより一部の *ɲ*-母は流音の音値を保留していたことが知られ、同時に「熱」(139; 522)、「饒」(569; 602-607) の如き *s*-(*ʒ*)母漢字の応用も見受けられ、かくて一部の *ɲ*-母の音値は *n* に転じたことがわかる。殊に注目すべきは「勢」(499)、「中」(528) 両字が音註となつてゐることである。この両字は共に *tʃ*-(*tʃ*'), *tʃ*-(*tʃ*)-声母に从ひ、これによつて *ɲ*-声母の音値は既に *gi*-母と混同し、且つ同様の変遷を経たことが知られる (*gi*-声母の項参照)。以上の所見に基いて考えるに、*ɲ*-母に就て Maspero がなした推論は充分に妥当であるとは云い難く、管見に依れば、*ɲ*-(*ʒ*)-母を構成する

に至つた声母の転化は古代越語の時代すでに始り、十五、六世紀當時は正に進行中であり、近代越語になつてから完了したと云わねばならぬ。

九、*ɿ*-声母

本訳語にて *ɿ*-母の語は全部で四十四例あるが、その内四十三例までが *ɿ*-母の漢字を音註として居り、唯一例 (Nos. 614, 615 火—兀) のみが声母を欠く漢字の「兀」を音註にして *lɿra* (火) を表わしているが、「兀」の AC は *nguet* であつて、*lɿra* と韻母が似て居り、且つ *ng-* と *ɿ*- は鼻音と辺音でよく混同するので、かゝる註音が行われたのであらう。一方、漢語の *ɿ*-母はそのまゝ越読にて *ɿ*- となつて居り、その間に何らかの変遷もない。これらの現象は訳語編成當時に於て *ɿ*-母の音値は既に極めて安定せることを証するものである。

一〇、*x*-声母

近代越語の *x*-母 (音値 *s*) は初期越語にも存し、佯語の中、南部方言にても現にこれを保有している。更に近代越語の *x*- (*s*-) 母の来源に就ては一部份は *k*-, *p*-, *t*-等の前添詞と *ɿ*-母の融合によつて生じた *s*-母が転じたものであるとも考えられるが (松本、上引書、p. 235)、管見によれば、一方に於ては *ɕ*- (*ts*-) → *s*- の転化過程もあつたものと思われる。本訳語の実例に徴するに、*x*- (*s*-) 母の語に対して一方では「参」、「桑」、「沙」、「賒」、「施」、「山」、「師」等の *s*- 又は *ʃ*- (*s*-) 母の漢字を以て音註となしているので、當時に於て *x*- (*s*-) 母は確実に存したことがわかる。但し、一方に於ては次の六例の如く、

(字 喃)

No. 24

青

蒼 (*tʃʌŋ*)*xanh*

樟

No. 134

春

中 (*tʃuŋ*)*xuân* (SV)

No. 471	扯	車 (tɕʰie)	xé	熾
No. 464	討	親 (tsʰian)	xin	噴
No. 640	低 (悪)	榛 (tsʰou)	xân	丑
No. 660	唱	昌 (tɕʰaŋ)	xuông (SV)	

何れも tɕʰ-, tsʰ- 両母の漢字を以て x- 母の越語を表明している。Maspero による xanh の字喃は「樟」で、声符は「掌」(*cán) に从ふので、Maspero はこの語は越読成立以前の時代 (即ち十世紀以前) 漢語「青」の古音 tsʰien から直接出たものであると推論した (Maspero, loc. cit., p. 55, n. 1)。又これとは別に、xé の字喃は「熾」(Si) を仮借字としているので、これは既に x- (s-) 値を有したと見られるが、xin の字喃は「噴」で声符は「真」(tɕʰian) であり、xân の字喃は「丑」(tɕʰiou) を仮借して居り、十三、四世紀の字喃製作時期に於て、xanh, xin, xân の三語は cānh, cìn, cāu の如き音であつたと思われ、近代までの間に c- > s の変化が生じたと考えねばならぬ。一方越読に於ても、上掲の xuân (春の SV)、xuông (唱の SV) の両語に対して夫々「中」と「昌」が音註にあてられていることにより、訳語編成当時越読に於て tɕʰ- (tɕʰ-) の s- に転化する現象が完了していないことが知られる。更に近代越語にて tr- (tɕʰ, tsʰ-) 母、又は ch- (čʰ-) 母と x- 母の間には常に否定し得ない親縁性が存すること (例えば tɕʰio (皮を剥く) は又 xo- とも称し、又 tré (溢れる) は xé とも称する) をも考慮すると、c- (ts, tɕ) 母が x- (s-) 母に転化する現象は十六世紀に於て尚進行中であり、十七世紀から十九世紀の間に完了したと見ねばならぬ。

一一、gi- 声母

この声母は ʒ の音標を含んではいるが、実際には舌根音の音値はなく、十六世紀に於て意大利語の顎濁擦音声母 j と同音値の音を表わしたのであるが、近代越語ではその音値は北圻では舌尖濁擦音 (spirante prélatale sonore) の z

である (A. G. Haudricourt, L'origine des particularité de l'alphabet vietnamien, *Dân Việt-nam*, No. 3. p. 65) 南圻及び中圻 (特に広平地方) では顎化介音 (semi-voyelle palatale) の *y* に転じている。本訳語はこの声母の変遷に就ても少からざる材料を提供する。Maspero は曾て No. 111 甲—甲 (*kia*) — *giáp* (SV) と No. 200 一茄—賈 (*kia*) — *già* (SV) (No. 200 を筆者は *cà* と解する) を引いて漢語の顎化清舌根音声母 *kʷ* (常に *a* 元音の前におかれる) が越読音の中で *gi-* (*j-*) に転化した現象に注目したが、かゝる現象は越俗音にも存するもので、No. 5 一風—教 (*kiau*) — *gió*; No. 60 一井—敬 (*kien*) — *giéng*; No. 102 一時—覺 (*kiau*) — *gió* の三例に於ける註音は何れも漢語 (音註) の *kʷ* に対して越語は *gi-* で応ずるもので、均しく十六世紀の顎化清舌根音が充分に舌尖濁擦音に転化していない事実を示している。但し *kʷ* と *j* の間には尚別の転化過程が存したらしく、Maspero は上述の *gió*, *giò* 両語が中圻北部では *chó*, *chú*, 又「交」の越読は北圻では *giao*, 南圻では *trao* となっていることに鑑みて、*ch-* (*ç-*) 母は古代越語の *kʷ* と中古越語の *j* (QN *gi*) の中間形であり、*ç* が *j* に転じた過程は十五、六世紀に生起したのであると推定した (Maspero, loc. cit., p. 24-25)。

かゝる *ç* → *j* の過程は当然又 *ç* が濁音化した過程と目することも出来る。Maspero は越語と侬語諸方言の比較によつて *gi* 母は多くの場合 *ch-* (*ç-*) 濁音化の結果に外ならないことを論証したが (Maspero, loc. cit., p. 31) 種の見解に関して本訳語も若干検討の材料を提出することが出来る。

	(音 註)	(近代越語)	(字 喃)
No. 148	正 (月)	蒸 (燙) (<i>tʃiəŋ</i>)	<i>giéng</i> 脛
No. 334	紙	鍾 (<i>tʃ'uei</i>)	<i>giây</i> 紙
No. 340	床	整 (<i>tʃiəŋ</i>)	<i>giuòŋg</i> 牀

No. 414

老

酢 (tʃa)

già

糴

No. 420

富 (人)

沼 (tʃiau) (委)

giâu

朝 (婁)

これらの諸例は均しく tʃ- (tʃ'-) 母の漢字を以て近代越語 gi- (z) 母の語の音註となっている。字喃も又「正」、「紙」、「朝」、「老」、「茶」等の捲舌音声母の字を声符又は仮借字となしている。殊に No. 420 giâu の字喃は「婁」とも書くので、同語音が *tʃlǎu > trǎu > giâu の転化過程を経て来たことが察せられる (tr- 声母の項参照)。按ずるに明代官話音には既に濁塞音或は濁擦音を喪失しているので、清塞音声母の tʃ- 又は tʃ'- (tʃ'-) 又は tʃ'- (tʃ'-) で以て j 音を表明することは有得ることであるが、一面北圻越語の gio (風)・giò (時) 両語が中圻北部では chò, chù となつて居り、又同じく北圻方言にて gio (混合する) は又 chò (又は trò)・gi (疑問詞・何) は又 chi' gia (蔗) は chà とも称し、更に giêng < chính (正の SV)・giông < chúng (種の SV) の如き関係をも考慮すると、上掲の「蒸」、「鍾」、「整」、「酢」、「沼」等の漢字が音註に用いられたことは十六世紀に於ても ch- (ç-) が濁音化して gi- (z) となる転化過程が殆ど未だ進行していなかったことを証するものである。唯こゝで注意すべきは次の例である。

No. 571

醋

忍 (zien)

giâm

酢

本例は齒齶擦濁音乃至は捲舌濁擦音の声母 (ʒ, ʒ') で以て舌尖濁塞音の gi (j) 母を表わして居り、本訳語編成当時確かに gi- 母が存在した証拠となり得る。併しかゝる語は一例しかなく、一般の状況に就て云えば、ch- > gi- (ç- > j) の転化現象は本訳語編成当時に始まり、十九世紀までの間に生起し、現在に至るも完了していないと考えねばならぬ。

D 唇音声母

1. ph- 声母

近代越語の *ph*-母は殆ど擦音化してその音値は *f* と変らない。越読に於て *ph*-母は漢語の *v*-と *f*-が転化したものであり、俗語に於ては泰語族の *f* と *v* に相当する (松本、上引書、p. 234)。本訳語に於て *ph*-母の語は僅かに六例しかないが、その内で *f*-母の漢字 (放、符) を音註となすのが三例、*p*-母の漢字 (舖) が一例、*p*-母の漢字 (半) が一例、声母を欠く漢字 (翁) が一例存している。この事は訳語編成當時に於て *f*, *p* (*p*′) 両音値が未だに混同せず、*f* 値は十九世紀の近代越語になつてから確立したと解せられよう。

二、*b*-声母

近代越語の *b*-母は俗語では猛吉語・泰諸語の濁唇音及び清唇音の転化せるものであり、越読では最初 *p*-以て漢語の *p*, *b*-に應じ、後にこれを濁音化して *b*-となしたのである (松本、上引書、p. 234)。本訳語にて *b*-母の語は全部で四十二例を算えるが、*p*-母の漢字を音註となすのが三十七例、*p*-母の漢字を音註となすのが五例ある。この事は勿論十六世紀の官話音に *b*-母が存しなかつた事実にも依るが、明らかに越読音で (漢語) *p* (*p*′) → *b*- (越読) の過程に合致し、同時に訳語成立当時 *b*-母が確立したことを証するものであらう。

三、*m*-声母

越語の *m*-母は佉語・猛吉語及び泰諸語の *m*-と *b*-両母に対応し、又越読にては *m*-母は漢語の *m*-母をそのまま受継いでいる。(松本、上引書、p. 235-236)。本訳語にて *m*-母の語は全部で五十四例に達するが、その全部が *m*-母の漢字を音註に採用して居り、これらの語の内、俗語音の字喃は又全部 *m*-母の声符又は仮借字を使用しているので、*m*-母の音値は字喃成立の年代たる十三、四世紀には既に確立し、近代越語に至るも変らないことがうかがわれる。

四、*v*-声母

Maspero に依れば近代越語の *v*-母には次の如く三種の来源があることになつてゐる。

- ① 漢語・泰語・猛吉語の w-
 ② 泰語・猛吉語の b- 及び p- → 前越語の *p-
 ③ 泰語の f- と v- → 前越語の *f-
 } 近代越語 v-

かゝる現象に就て本訳語は次の如く可成りの論考の材料を提供している。

第一群

	(音 註)	(越 語)	(字 喃)
No. 25	罔 (vəŋ)	vàng	鑽
No. 426	罔	vàng	鑽
No. 94	文 (van)	vuôn	園
No. 268	文	vuôn	猿
No. 128	威 (uei)	vi (SV)	
No. 246	威	voi	獐
No. 257	惟 (vi)	vit	鵠
No. 653	問 (van)	vân (SV)	

第二群

No. 33	短	半 (pan)	văn	問
No. 216	荔枝	(捋)白 (pai)	vài	緋
No. 278	爪	剝 (pau)	vuôt	獐

No. 316	板	半	vân	版
No. 346	壺	宝 (pau)	vò	圩
No. 385	皇帝	波 (puo)	vua	希
No. 502	乳	布 (pu)	vú	乳
No. 535	拍	播 (po)	vỏ	撫
No. 545	布	帛 (pai)	vải	緋
No. 553	補	八 (pa)	và	播
No. 656	写	別 (pie)	viết	曰

Maspero は本訳語所載の v- 声母の語例の中に、①音註に合口音 (u-) の漢字を採用せるものと、②音註に p- 母の漢字を使用するものの二群が存することを認め、この現象は訳語成立当時 (Maspero によれば十五世紀) に於て *p-, *u- (w-) 両母が未だ混同せず、越語の v- 母が未成立の証拠であると推考した (Maspero, loc. cit., p. 74; 松本、上引書 p. 236) が、この見解は更に検討を加える要がある。今上掲の表に就て見るに、第一群の「罔」、「文」、「惟」、「問」等の所謂合口音の音註の音値は十四世紀の中原音韻乃至は十五世紀の韻略易通の時代には v- 母を有していた (董、上引書、p. 24) のであるから、これは充分に十五、六世紀の越語に v- 母が存在したことを証する。又第二群に就て見ても音註に充てられた p- 母と越語の v- の間には双唇塞音と唇齒擦音の区別はあれども、共に唇音 (labiale) であつて音韻的に頗る近い関係にある上に、字喃の面から見ると、vân (短) の字喃は「問」(SV vân)、『vải の字喃は「緋」(声符「尾」の SV は vi)、『vuốt の字喃は「澤」(声符「筆」の SV は bút)、『vân (板) の字喃は「版」(SV bản)、『vò の字喃は「圩」(声符「干」の SV は vù)、『vua の字喃は「希」(声符「布」の SV は bò)、『vỏ の字喃は「撫」(声符「無」

の SV は vô)・vả の字喃は「播」(SV bà)・viết の字喃は「田」(SV viết)であつて、声符又は仮借字の越読は v- 母又は b- 母を具有して居り、明らかに v- 母が本訳語編成のはるか以前、即ち十三、四世紀頃字喃が成立した時代から既に存在した証拠となり得るものである。唯 v- 母の語例で稍異例に属するのは

No. 146	去(年)	麦(難)	vũa	皮
No. 243	芝麻	共	vùng	羣

の二例であつて、No. 146 は m- 母の「麦」を以て vũa の音註と、No. 243 は k- 母の「共」を以て vùng の音註となして居るが、前者の字喃は「皮」(SV bì)であり、後者の字喃は「羣」(声符「暈」の SV は vùng)であつて、何れもその v- 母は字喃成立の時代から確定しているので、No. 146 の「麦」(vũa)は m- と v- 両唇音声母の近似に基く註音であり、No. 243 の音註「共」は恐らく「奔」(p'en)の誤伝であらうと思われる。

附 註

(1) 本訳語では近代越語にて tr- 母を有する語に対して ts- (ts-) 母の漢字が音註として使用されている例が五例、即ち「者」(224, 567)・「知」(295)・「止」(302)・主 (295; 320)・ts' (ts'-) 母の漢字が三例・冲 (34, 693; 597)・忱(212) があるが、その表現せる語は何れも越読音(又はその variant)であり、これにより漢音 ts- と越読音 tr- (音値 ts-) の一致を見ることが出来る。唯一つの例外が存するのは

No. 610, 611	糠	阻	trầu
--------------	---	---	------

の例である。音註「阻」の音値は近代官話音では舌尖擦清音の tsu であるが、中原音韻は混合舌葉音の tsu で、捲舌音に近い。これは明らかに十六世紀にて tr- (ts-) 母が存した事を物語るが、十七世紀中葉の Dict. には依然として tlầu となすからには訳語編成当時に tr- が tr- に転化した実例となすことは出来ないであらう。

(2) 本訳語から更に次の諸例が挙げられる..

No. 8	雷	滲 (Jem)	sân
No. 39	明	賞 (Jiaŋ)	sàng
No. 100	早	甚 (Jiem)	sóm
No. 122	丑	轆 (ts'ou)	s'ru (SV)
No. 221	生	僧 (Jəŋ)	sông
No. 263	蟲	搜 (sou)	sâu
No. 300	吠	束 (su)	súa
No. 319	庭 (庁)	春 (tɕ'uen)	sánh
No. 389	事	事 (Si)	sự (SV)
No. 423	僧	塞 (sai)	sai
No. 521	光	上 (Jiaŋ)	sáng
No. 584	鮓	沙 (Sa)	s'ra
No. 642	砂	施 (Si)	sa (SV)
No. 650	勅	尺 (tɕ'i)	sắc (SV)
No. 704	稀	些 (sie)	s'ra

これらの例により、漢語の s- (s-), tɕ- (tɕ-), s- の三声母が越読にて s- 母となる関係もはつきりする。

(3) 寛政訳語では「庖丁」を「ヤア」(ya), 「油」を「ヤヲ」(yao)と訳している。この両例は或は十八世紀の末年

に至るも *y*-母が *z*-母に転化する過程が未完了の事実を証明するととられるが、近藤正斎全集（巻一）所載の漂民始末記によると源三郎等が漂流した地点は西山阮氏治下の安南国、即ち越南中圻の地であるので、この二例を以て北圻方言の *d*-(*z*)母が未だ確立しなかつたとなすことは出来ない。

(4)

No. 62	牆	整 (tɕieŋ)	tʉòŋ (SV)
No. 121	子	字 (tsi)	tʉ (SV)
No. 131	戌	足 (tsiu)	tuət (SV)
No. 386	綵	從 (ts'iuŋ)	tóng (SV)
No. 448	辭	滋 (tsi)	tʉ (SV)
No. 261	雀	爵 (tsiau)	tʉóc (SV)
No. 564	皂	遭 (tsau)	tào (SV)
No. 627	晶	靜 (tsiaŋ)	tiŋh (SV)
No. 658	字	資 (tsi)	tʉ (SV)
No. 696	左	雜 (tsa)	tà (SV)

これらの諸例により、本訳語編成当時の越読音は比較的官話音に接近していたことがわかり、越読にて *ts*-(*tʃ*-)→*t* の過程は本訳語成立後になつてから完結したことが想像される。

(5) Nos. 288, 628 に見える「象牙」に対しても本訳語は「生」を以て音註となしているが、この二例に於ては Maspero の考えるように *rəŋg* の音を表わすのではなく、実は *səŋg* の音を表わすと考えねばならない。

第五章 語法と語彙に関する考察

語法及び語彙の方面より見ると、本訳語の所載と近代越語の語例とは若干の差異があり、少しく解説を加える必要がある。本訳語の記載は何れもが単語又は「天晴」、「雨下」の如き最も簡單なる章句の羅列であるので、其の間に見られる現象も語彙の応用情況と修飾語と被修飾語間に限られている。以下その顯著な例に就て略述し、最後にこれらの考察に基き再び安南訳語編修の具体的過程に就いてふれたい。

(1) 越語の句法 (syntax) によると、修飾語の位置は僅少の例を除き常に被修飾語の後に位置する。これは越語と泰語に見られる共通の現象であるが、本訳語にては玄本以外の六本は何れも一律にすべての修飾語を被修飾語の前に置いている。その情況は殆ど漢語と異らない。今試みに丙類華夷訳語に含まれる百夷訳語と暹羅訳語(何れも河内本による)を参照するに、この兩種の訳語共にその本来の句法に基いて修飾語を被修飾語の後に置いていることが認められる。例えば、

	(漢語)	(音註)
百夷訳語		
雲	莫	
黒雲	莫爛	
紅雲	莫煉	
綵雲	莫唛	
白	不的	
暹羅訳語		
白馬	麻不的	

白布

帕不的

これによつて見るに、本訳語の編修は曾つて特殊な、他種の訳語とは同じからざる過程を経たことと思われる。この様に越語句法を無視した措置は明人が越文を同文と見た觀念や明初永樂朝の越南に対する同化政策の影響等によると思われるが、同時にあとで述べる様に本訳語編修當時に採用した方式によるものとも考えられる。

Gaspardone 氏は安南訳語の欠点の一部として、a) 同訳語が平凡な語彙集であつて語法に對し何らかの寄与もしないこと、b) 構造が幼稚なこと、c) 修飾語 (déterminant) が越語の常例に反して、漢語の如く被修飾語 (déterminé) の前に置かれている等の諸点を挙げたが、幸にして、かゝる欠陥は玄本によつて可成りの程度までは正された。先ず a)、b) 両点に就て見るに、本訳語は實際の日常會語の學習に便ならしめる目的を以て編せられたのであり、何も越語を専門に研究することを趣旨としたのではないから、その構造が簡單であることは言うを俟たない。更に本訳語が語法に對して何らかの寄与をもしないとは筆者は思わない。次に c) については、玄本に於ては修飾語と被修飾語を含む語例の大多数は被修飾語、修飾語の順に置き換えられている。その具体的な情況は第二章、訳語の解釈の個々の語例に見られる通りであるが、これに依り、當時の句法は現今の夫とは異ならないことが明瞭になつたわけである。

(2) 本訳語に見られる語彙はこれを二つの系統に分つことが出来る。一つは漢語からの借用語 (emprunté) であり、その音は越読 (SV) 又はその訛形 (variant) である。他は俗語であるが、これは更に猛吉 (Mon-khmer)、泰 (Thai)、佯 (Muong) 三語と同源の語に夫々分けられる。今本訳語に於ける漢語の例を見るに、總語例 716 例の内、255 例が漢語又は漢語を含んでいる。現今の越語の語彙には一体どれ程の漢語の借用語が存するか誰もこれを勘定した者は居ないが、一般には約三分之一から二分之一の語は漢語であると認められている。かく見ると十六世紀の状態と現在の間には大した差異が存したとは思われない。但し、本訳語にて漢語の採用は文史・宮室・花木・器用諸門に於て特に著しい、この

事實は中国の文物が越人の日常生活にあたえた影响の具体的情況を示すものであらう。

更に本訳語に見受けられる猛吉・泰両語系の語の内、どれが猛吉系であり、どれが泰系であるかを弁別する事は容易ではない。蓋しこの両系の語は越南語彙にて久しく共存し、且つ極めて混淆しているからである。併し一般的に云つて、数詞、天体及びこれと関連する語（例えば日月の名称、曆法、氣象）、土地に關係する諸名（山川、石、森林）、動植物名、人倫關係及び居住に關する語の大多数は猛吉語系に属しているので、本訳語の数目、天文、地理、時令、花木、鳥獸、人事、身体諸門の中で漢語を除いた外の大多数の語はこの系統に属するわけである。併しながら、天文關係の語の内、*trăng* (月)、*mưa* (雨)、*gió* (風) 諸語は猛吉系であるが、*mọc* (霧)、*mùa* (四季) は泰語であり、地理關係の語彙の内、*nước* (水)、*rủ* (山、森林)、*sông* (河川) は猛吉系であるが、*đồng* (平原)、*rẫy* (干河)、*mỏ* (鉞) は泰系であり、身体關係の語彙の内、*mắt* (眼)、*chân* (脚) は猛吉系であるが、*lưng* (背)、*bụng* (腹)、*trc* (みぞおち)、*cằm* (頤)、*bì* (腓)、*cổ* (頸) は泰系であり、衣服關係の諸語の内、*áo* (衣) は猛吉系であるが、*nit* (腹巻) は泰系であり、米作に關係する諸語で *lúa* (稻) は猛吉系、*gạo* (米) は泰系であり、又鳥禽の内、*chim* (鳥) は猛吉系であるが、*gà* (鶏) と *vit* (鴨) は泰系であると云うように一つの部門の語彙が一つの系統の語で独佔されるわけではなく、要するにどつちかの系統の語彙が比較的優位を占めるのにすぎない。

(3) Gaspardone 氏は本訳語の語彙に見られる欠点として、更に(1)漢語に対する越語の該当語 (*équivalent*) が余りにも屢々越語でなくて、越読 (*sino-vietnamien*) であること、例えば No. 665, *tiếng* (*trắng*) に対する *bach* (白の SV) No. 217 の *cau* に対する *binh-lang* (檳榔の SV) No. 379 *máy dết* に対する *khung cùi*, etc.; *o* 訳語の際可成りの感ちがいがあること、例えば No. 248 牛 (*boeuf*) に対するに水牛 (*buffle*) No. 249 羊 (*mouton*) に対するに山羊 (*chèvre*) No. 524, 閉 (眼) = *fermer* (*les yeux*) に対するにト (眼) *baisser* (*les yeux*); *ti*

一つの漢語が越語によつて漠然たる意味となること、例えば、No. 384 鎖呐—敢—kén 等を挙げているが、管見によれば Gaspardone 氏の指摘は部份的には正しいが、部份的には同氏自身の感ちがい又は誤解に基いている。例えば、d) 項の例の中で、No. 217 の檳榔に対しては玄本は「萐高」を音註として立派に trầu (trầu) cau とよませているし、No. 379 の織機に対しても玄本は「各賤」を充てて cùt dết の音を暗示している。又 e) 項の指摘にしても No. 248 の牛に対して玄本は「跛毆」をあてて bò trầu (*klau) とよませている。この例の如きは感ちがいどころか、却つて漢語の意味を補充していると見ねばならぬ。No. 249 の羊 (chèvre) の如きは Gaspardone 氏自身の誤解であつて、音註の「得」を de (chèvre) と解する事は極めて正しい。No. 524 の閉—雑の如きは完全に Gaspardone 氏の誤解で、音註の「雑」は chấp (閉ぢる) と読むべきなのに同氏は tháp (ぎげる) と誤読したのに基く。更に f) 項の No. 384 にしても玄本は音註に「奪那」を充て、 tóa nót (鎖呐の SV) を表示しているのであるから、Gaspardone 氏の指摘は当らない。以下玄本以外の諸本の欠陥又は不備に対して玄本が修正乃至は補充を加えた例及び訳語によつてうかゞはれる当時の語法的一端を詳述しよう。

a) 本訳語で「日」に関する語例は全部で二十六例あり、その内、Nos. 2, 12, 13 は「日頭」(即ち太陽)を指し、他の Nos. 32-36, 136-140, 162-174 諸例は暦の上の「日」を指しているが、玄本を除く諸本は一律に音註として「靄」を充て、 ngày とよませている。これにより、十六世紀の越語には「太陽」と「暦日」の区別はなかったのではないかと疑われたが、玄本は No. 2 に「靄」をあてるも、Nos. 12, 13 には「雷」をあてて biòi とよませて、これを区別している。これにより「日」に関する越語の用い方は近代越語と異ならないことが判明した。但し、昨日、今日、明日の如き暦日の称呼に就ては次に例示する如く近代越語と稍異なる。

	(前 日)	(昨 日)	(今 日)	(明 日)	(後 日)
安南訳語	ngày trước	ngày rồi	ngày nay	ngày mai	ngày sau
近代越語	hôm kia	hôm qua	hôm nay	ngày mai	ngày kia

備考: hôm は時令上現在及び過去の「日」を指す。

- b) Nos. 3, 14, 15, 37-39 諸例の「月」は天体の「月球」を指す語であり、一方 Nos. 141, 142, 148-161 諸例の「月」は時令上の「月」であるが、諸本は一律に「燙」をあてて tháng と読ませ、十六世紀当時双方の区別がなかったのではないかと疑わせたが、玄本は No. 3 に「物」(AC miuet) をあて、Nos. 14, 15, 37-39 に「月」(AC ngiwet) をあてて nguyệt (月の SV) を表わし双方を区別している。Maspero は曾て十七世紀の北圻越語に tháng (時令上の月) と blăng (◇trăng) の区別があることを認め、この両語を岱語諸方言と比較した結果、越語の tháng は岱語の krai, khlan に相当し、その間に *il-rai > sai > t'ai の一連の変遷過程を経たものであるとし、更に tháng と blăng は同一の原語より出でたものなるべく、その分出の時期は越岱両語分離時期以前に遡ると推考した。かく見ると、十五、六世紀当時 tháng と blăng の区別は当然存したわけであるが、玄本が何故 blăng を表記せずして、「月」の越読たる nguyệt を表わしたのかは判明しない。恐らくは blăng の複合輔音たる bl- の表記が容易でなかったからであろう。次に十二ヶ月の称法に関しては、正月から十月までの称呼は近代越語と同じで、均しく数詞に tháng を加えて(一月は正月と称する)いるが、十一月と十二月に対しては、訳語が tháng mười một (即ち十一月)、tháng mười hai (即ち十二月)となすのに対して、近代越語は tháng một (即ち「一月」)、tháng chạp (chạp は「臘」の SV たる lap の variant) と称している。更に「今月」、「前月」の称法は近代越語と同様である(訳語解説 Nos. 141, 142 参照)。
- c) 「去年」、「今年」、「明年」の呼称に関しては本訳語と近代越語の間に多少の相異がある。其の情況は次表の如くで

ある。

(旧年) (去年) (今年) (明年) (後年)

安南訳語 năm cũ năm vừa năm nay năm mai năm sau

近代越語 năm kia năm ngoài năm nay sang năm năm sau

d) 代名詞の用法に就ては本訳語の中で次の如き諸例が認められる。

No. 440 我母 刀也(玄本) 民也

No. 441 你母 挽也(近本) 晚也

No. 442 他母 那也(近本) 耶也

この三例に見える「刀」、「挽」、「那」の三字は夫々 tao (第一人称)、nấy (第二人称) 及び nó (第三人称) の三個の代名詞を表わしているが、均しく卑称である。殊に No. 441 の「挽也」(mè nấy) の如き語は人をのしる語である。尚 No. 440 の玄本の「民」は同じく第一人称の mình を表わすが、Nos. 441, 442 の近本の「晚」と「耶」は誤字である。更に「No. 110 — 今 — 奈」に見える「奈」は指示代名詞近称の nay を表明する。近代越語で nay は事物の近称ともなり得るし、時間上の近称ともなり得るが、本例は後者の用例に属する。

e) 本訳語には次の如く三種の陪数詞の用例が見えている。

No. 240, 242 山薬 谷買

No. 279 麟 蒙論

No. 392, 412, 524 妻子 介干

これら諸例の内、「谷」は球茎又は球根の陪数詞たる cũ を表わし、「蒙」は哺乳動物の陪数詞 muông を表わし、「干」

は一切の動物、生物、小刀、眼玉、将棋、印章、紙牌の陪数詞たる *con* を表わす。

f) 本訳語には否定詞の用例が三ヶ所見えている。

No. 17

無雲

張箇梅

No. 52

無雨

張箇麦

No. 457

無

張箇

この三例の「張箇」は否定句の *chàng có* を表明している。*chàng* は否定詞であり、*có* は「有る」の義 (No. 456 一有箇) であり、疑問句は *có chàng* となる。陳剛中の交州藁には「不好」を「張領」と訳しているので、十三世紀からこの形が一般的に用いられたことが想像される。尚 *chàng có* の形は近代越語でも通用されるが、実際上は *không có* の形がもっと多く用いられている。*không có* の来源は余りはつきりしないが、甲寅漂民始末 (近藤正斎全集卷一) では「日本ニ有歟」に対して「ニヤポンカアホン」 (*Nhật-bản có không?*) とあてていることから見ると、十八世紀末年には既に一般に用いられたと思はれる。

g) 本訳語にては明らかに錯誤の例が可成り存している。今その顕著な例を挙げよう。

	(漢語)	(音註)	(越語)
①	No. 146 去年	低難 (玄本) 麦難	<i>năm vừa (năm đi ×)</i>
	No. 443 去	低	<i>đi</i>
②	No. 211 木香	格亨	<i>huong (SV) cây (×)</i>
	No. 186 木	格	<i>cây</i>

③	No. 214	乳香	布亨 (玄本) 由亨	nhũ hương (SV) (vú hương ×)
	No. 502	乳	布	vú
④	No. 240	山藥	内買 (玄本) 谷買	củ mài (núi mài ×)
	No. 54	山	内	núi
⑤	No. 431	長子	倭子	dài tử (SV) (×)
	No. 32	日長	靄倭	ngày dài
	No. 177	夜長	忍倭	đem dài
⑥	No. 520	梳頭	勒斗 (玄本) 則斗	chải đầu (SV) (lược đầu ×)
	No. 363	梳	勒	lược
⑦	No. 216	荔枝	捋昂 (玄本) 捋白	*blai (trái) vải (vải ngành ×)
	No. 205	枝	昂	ngành
⑧	No. 627	水晶	匿靜	nước tinh (SV) (×)
	No. 59	水	匿	nước
	No. 643	水銀	匿拔	nước bạc (×)
⑨	No. 59	水	匿	nước
	No. 621	銀	拔	bạc
⑩	No. 638	白銀	八拔	bạc bạch (SV) (×)
	No. 28	白	八	bạch (SV)

[No. 621 銀 抜

bạc

備考：(×)を附したものは錯誤の例である。

上掲の十項目の内、玄本以外の六本が初例に與えた音註はいずれも錯誤の例である。各項の初例に見える二個の音註の内一字(即ち低、格、布、内、倭、勒、昂、匿、抜、八)は均しく同項の下例から或はその音註を借り、或はその音註を機械的に合併して成立した語であつて實際の語彙とは全く合わないものである。但し、十項の内、第一、三、四、六、七の五項目は既に玄本によつて合理的に訂正されていることは注目に値する。更に次の二例も正確な訳語とは目し難い。

No. 38 月欠 燙少(玄本)月少

nguyệt (SV) thiếu (SV)

本例の(月欠)は明らかに太陰の欠損を指すのであるから「欠」の訳語はその越読音 *khuyết* を採用すべきものである。按ずるに、越語で「小月」のことは *tháng (nguyệt) thiếu* 「大月」のことは *tháng (nguyệt) thừa* と称するので若し「月欠」を *tháng (nguyệt) thiếu* と訳すると、その義は「小月」と區別が付かぬことになり、編者が「月欠」と「小月」両義の越語によく通じていないこともうかゞわれる。

No. 526 眼跳 言勾(玄本)慢勾 *mắt điều* (SV)

諸本の「言」と「勾」両字は明らかに *nhãn* (眼の SV) と *điều* (跳の SV) を表わす。玄本は「言」の代りに「慢」をあてて、*mắt* (眼) を表わしているが、「跳」には矢張り「勾」をあてている。漢語で「眼跳」と云うと、その意味は尚曲りなりに通るが、越語で「眼跳」を直訳すると越南人には容易に理解され得ない。

h) 本訳語では一つの名詞に対して二語の訳語が与えられた例が次の如く五例存している。

No. 58 石 喇大 *đá thạch* (SV)

No. 247 馬 麻兀 *mã* (SV) *ngựa*

No. 248	牛	跛毆	bô *klâu (trâu)
No. 281	蟹	蓋戈	giài (SV) cua
No. 413	奴婢	堆来堆愛	tôi *tlai (trai) tòi gài

上掲の諸例の内、Nos. 248, 413 の両例の訳語は何れも与えられた漢語の語義を類別又は補充しているが、Nos. 58, 247, 281 の三例は越語の該当語として越読音と俗音の双方が挙げられている。所がこれらの諸語(つまり「石」、「馬」、「蟹」)が修飾語を伴った例を見るに、先ず「蟹」は No. 281 一例しかないので問題は無い。次に「馬」は No. 247 以外に Nos. 289-293, 298, 326, 380 に見えているが、玄本を除く諸本は一律に音註として「厄」を充てるのに対し、玄本は No. 247 に「麻兀」をあてる外、Nos. 289, 290 に「麻」、No. 291-293 に「回」、No. 298 に「麻」、No. 326 に「兀」、No. 380 に「麻」と云う風に、「兀」、「厄」、「麻」の三字を音註に使い分けして居り、音註の採用法から見れば誠に氣紛れで劃一性を欠くけれども、別に語義の方で支障を来していない。所が「石」の方は No. 58 以外に、Nos. 89 (大石)、92 (石路)、230 (石榴)、626 (玉石)、629 (宝石) 諸例にて、諸本のみならず、玄本までが「石」に対する音註として「喇大」があてられているのは頗る機械的な音註の充て方で、実際の語法にもとると云わねばならぬ。つまり、Nos. 89, 92 両例の音註に於ける「大」、Nos. 230, 629 両例の音註に於ける「喇」は何れも過剰の不必要な文字である。

i) 玄本は他本と異なる音註を採用することによつて与えられた漢語の語義により近接した越語の *équivalent* を表わしている例が可成りある。これらの例はより精確な音韻の提示、又は感ちがいの是正、より古い語形の提示、又は越読に對して俗語を、俗語に對して越読を与える等の場合を含んでいる。併し總体的に云つて、玄本の音註の全部が確切であるわけではなく、その中には他本に比べて却つて遜色のあるもの、又は不可解なものをも含むことは注意されねばならない。その具体的な情況は第二章訳語の解釈の各例にて詳述したからこゝでは贅述しないが、特に玄本の音註の充て方が恣

意的であり、劃一を欠くことは指摘されねばならぬ。その一例を挙げるならば、Nos. 96, 185, 232, 235-238, 594, 652, 672 の「花」に対する音註として玄本以外の諸本は一律に「滑」を充てるのに対して、玄本は「滑」、「華」、「花」と云う風に同音の字を不統一に音註に採用している。

(4) 本訳語を通じて見るに、訳語の音註が時折その音註が表わす越語の字喃の声符に一致する例が見られる。例えば

	(音註)	(字喃)		(音註)	(字喃)
No. 10	退——	喂 (thối)	No. 13	吝——	洛 (lạc)
No. 20	連——	連 (*tiên > trên)	No. 68	内——	内 (núi)
No. 345	内——	垸 (núi)	No. 359	夸——	跨 (khóa)
No. 368	布——	鉢 (bát)	No. 450	喃——	鼈 (nằm)
No. 465	悶——	悶 (mùn)	No. 467	雷——	蹠 (lui)
No. 519	真——	蹠 (chân)	No. 575	安——	安 (ăn)
etc.,					

かゝる現象は本訳語の編成に越南人が参与したことを証するものであろう。一方、本訳語音註の中には陳剛中の交州藁に見える訳語と同じ文字を採用するものがあることも注意される。例えば、「風」に対する音註の「教」(giáo)、「雲」に対する音註の「梅」(mây)、「子」に対する音註の「干」(con)、「女子」(娘)に対する音註の「愛」(gái)、「無」(不)に対する音註の「張」(chàng)はその例である。この事は訳語の編修に当つて編者が交州藁を参考した痕跡であるとも考えられよう。これらの現象並びに上述の訳語の諸欠陥を綜合して推考するに、安南訳語の原編者は越語に精通した人物でなかつたことが先ず指摘されうる。仮りに越語に精通した漢人、或は漢文に精通した越南人が編者であつたならば上文に

て指摘した如き錯誤を犯すはずはないからである。かくして、訳語原本の編者は越語に余り通曉しない漢人と漢語を余りよく知らない越人の informant の合作の結果であると推測される。前者は会同館の官吏であり、後者は所謂安南の来人であろう。更にその実際の編纂の情況は前者が預め単字より成る漢語の表を後者に示して、漢字で以て各語に該当する越語音を標記せしめ、しかるのち、このようにして製成された字彙に専ら依据して、与えられた音註を漢語の各例に機械的に充て、丙種の其他の訳語と同様な体裁に編輯整理したものであり、其間越語の実際の語法や語例は全然顧慮しなかつたのであろう。これに対して修訂本たる玄本は明らかに上述の欠陥をわきまえて改訂されたのであるが、惜しいかな、音註採用の方法が余りにも不統一であつて十分に整備された内容を盛ることが出来なかつた。要するに原本の音註の充て方が余りにも実状を無視して、劃一的、機械的であつたのに比して、玄本は又余りにも恣意的であつた。かゝる現象は訳語修訂の際の informant が一人ではなく、実際には数人の informant によつて与えられた音註に基いて考訂され、而もその結果が未だ充分に整理されず、云わば玄本は一種の未定稿であつたものと推考することが出来よう。

参考及び引用文献 (BIBLIOGRAPHY)

BOOKS

- Alexandre de Rhodes, S. J., *Cathechismus (pro iis qui...)*, Rome, 1651. (Reédition en 1961 à Saigon).
J. Klapproth, *Abhandlung ueber die sprache und schrift der Uiguren*, 1822.
W. Gruber, *Die sprache und schrift der Jucen*, Leipzig, 1896.
P. Souvignet et Dronet A+B, *Variétés tonkinoises*, Hanoi, 1903.
Vuong-Duy-Trinh, *Thanh-hóa Quan-phong. Hải-dương*, 1904.
P. Souvignet, *Les origines de la langue annamite*, Hanoi, 1924.

- E. C. Chodzko, Introduction à l'étude de la langue annamite, Haiphong, 1932.
- G. Cordier, Etude de la littérature annamite, Saigon, 1933.
- Đào-Duy-Anh, Việt-nam Văn-học Sử-cương, Hanoi, 1938.
- Ibid., Cổ-sử Việt-nam, Hanoi, 1955.
- Trần-Trọng-Kim, Phạm-Duy-Khiêm et Bùi Kỳ, Grammaire annamite, Hanoi, 1940.
- Nguyễn-Đổng-Chi Việt-nam Cổ Văn-học-sử, Hanoi, 1942.
- Dương-Quảng-Hăm, Việt-nam Văn-học Sử-yếu (Précis d'histoire de la littérature annamite), Hanoi, 1944.
- Nguyễn-Văn-Huyên, La civilisation annamite, Hanoi, 1944.
- Jeanne Cuisinier, Les Mœurs, Paris, Institut d'Ethnologie, 1948.
- Murray B. Emeneau, Studies in Vietnamese Grammar, University of California Press, 1951.
- R. B. Jones & Huỳnh-Sanh-Thông, An Introduction to Spoken Vietnamese, Washington D. C., 1957.
- Lê-Văn-Lý, Le parler vietnamien, Tủ sách Viện Khảo-Cổ, I, Saigon, 1960.
- G. Coêdes, Les peuples de la péninsule indochinoise, Collection Sigma 2, dirigée par Henri Hierarchy, Paris, 1962.
- Trương-Văn-Chinh & Nguyễn-Hiến-Lê, Khảo-luân về Ngữ-pháp Việt-nam, Đại-học Huế, 1963.
- Nguyễn-Khắc-Kham, Tiếng Việt Nôm Xưa (The archaic vulgar Vietnamese), Trường Đại-học Văn-khoa, Saigon, 1964.

ARTICLES

- E. H. Parker, The Mường language, China Review, vol. XIX, p. 267-280.
- P. Pelliot & L. Cadière, Première étude sur les sources annamites de l'histoire d'Annam, BEFFEO, t. IV, 1904, p. 617-671.
- E. Denison Ross, New light on the history of the Chinese Oriental College and a 16th century vocabulary of the Luchuan language, T'oung-pao, serie II, 1908, p. 689-695.
- P. Pelliot, Bibliographie, BEFFEO, t. IX, 1909, p. 170-171.
- Ibid., Compte rendus, Journal Asiatique, juil. -aout, 1914, p. 177-191.

- L. Aourousseau, Bibliographie, BEFEO, t. XII, 9, 1921, p. 198-201.
- Ibid., La première conquête chinoise des pays annamites, BEFEO, t. XXIII, 1923, p. 137-244; Appendice: Note sur les origines du peuple annamite, BEFEO, t. XXIII, p. 245-264.
- H. Maspero, Etudes sur la phonétique historique de la langue annamite, Les initiales. BEFEO, t. XII, 1, 1912, p. 1-126.
- Ibid., Etudes d'histoire d'Annam: L'expédition de Ma Yuan, BEFEO, t. XVI, 1916, p. 11-28; Le royaume de Văn-lang, BEFEO, t. XVIII, 1918, f. 3; La frontière de l'Annam et du Cambodge du XIII^e au XIV^e siècle, BEFEO, t. XVIII, 3.
- Ibid., Quelques mots annamites d'origine chinoise, BEFEO, t. XVI, 1916, p. 35-39.
- J. Przyluski, L'Annamite (dans A. Meillet et M. Cohen, Les langues du monde, Paris, 1924, p. 395-398.)
- Nguyễn-Văn-Tò, Langue et littérature annamite: Notes critiques, BEFEO, t. XXX, 1930, 1-2, p. 144-145.
- E. D. Edwards & C.O. Blagden, A Chinese vocabulary of Malacca words and phrases collected between A.D. 1403 and 1511 (?), Bulletin of the School of Oriental Studies, vol. VI, part 3, 1931, p. 715-749.
- Lê Du (Sô-cuông), Chữ nôm với chữ quốc-ngữ, Nam-phong, mai, 1932.
- Ibid., Nguồn gốc văn-học nước nhà, Bulletin de la Société d'Enseignement mutuel du Tonkin, Hanoi, 1934.
- E. Gaspardone, Deux inscriptions chinoises du Musée de Hanoi, BEFEO, t. XXXII, 1932, p. 476-480.
- Ibid., Bibliographie annamite. Introduction, Gouvernement, Histoire, Littérature, Légendes, Confucéisme, Bouddhisme, Traites divers, BEFEO, t. XXXIV, 1934, p. 1-172.
- Ibid., Le lexique annamite des Ming, Journal Asiatique, année 1953, p. 355-397.
- Ibid., Champs Lo et chams Hiong, Journal Asiatique, année 1955, p. 461-477.
- Nguyễn-Văn-Ngọc, Người Mường, Nam-phong, vol. 16, p. 417-438.
- Cl. Madrolle, Le Tonkin ancien, BEFEO, t. XXXVII, 1937, p. 263-333.
- Ed. Edwards & C. O. Blagden, A Chinese vocabulary of Cham words and phrases, Bulletin of the School of

Oriental Studies, vol. X, part 1, 53-91, 1939,

Dương-Quảng-Hàm, *Le Chữ Nôm ou écriture demotique. Son importance dans l'étude de l'ancienne littérature annamite*, Bulletin de l'Instruction Publique, No. 7, 1942, p. 277-286.

Liên Giang, *Chữ nôm có từ bao giờ và ai sáng chế ra chữ ấy*, Tri-tân, No. 40, mars 1942.

Norman Wild, *Materials for the Study of the Ssu I Kuan* (Bureau of Translators), Bulletin of the School of Oriental and African Studies, vol. XI, 1943-46, p. 617-640.

Maurice Durand, *Compte rendus*, Dân Việt-nam, No. 1, 1948, p. 53.

Robert Shafer, *Le Vietnamien et le Tibeto-birman*, BEFFEO, t. XL, 1940, p. 439-442; Dân Việt-nam, No. 1, 1948, p. 13-22.

Andre-G. Haudricourt, *L'Origine des particularités de l'alphabet vietnamien*, Dân Việt-nam, 3, 1949, p. 61-68.

Ibid., *La place du vietnamien dans les langues austroasiatiques*, Bulletin de la Société Linguistique, vol. 49, 1953.

Ibid., *L'Origine des tons en vietnamien*, Journal Asiatique, année 1954, p. 69-82.

Nguyễn-Đình-Hòa, *Chữ Nôm, the demotic system of writing in Viet-nam*, Journal of the American Oriental Society, vol. 79, No. 4, 1959, p. 270-274.

Bửu Cầm, *Nguồn gốc chữ nôm*, Văn-hóa Nguyệt-san, No. 50, 1960, p. 347-355.

Bùi-Quang-Tung, *Le soulèvement des soeurs Trưng, à travers les textes et le folklore vietnamien*, Bulletin de la

Société des études indochinoises, t. XXXVI, No. 1, 1961, p. 71-85.

Le docteur Reynaud, *Etude des phonèmes vietnamien, par confrontation entre le vietnamien et quelques dialectes des Hauts-Plateaux du Sud-Vietnam*, Bulletin de la Soc. des Etudes indo., t. XXXVII, No.2, p. 1-117, 1962.

DICTIONARIES

Alexandre de Rhodes, S. J., *Dictionarium Annamitico-Latinum*, Rome, 1649.

J. L. Taberd, *Dictionarium Annamitico-Latinum*, Serampore, 1838.

Huỳnh-tĩnh Paulus Của, Dictionnaire Annamite, Đại-nam Quốc-câm Tự-vi, tome I : A-L, 1895; tome II : M-X, 1896, Saigon.

F. M. Genibrel, Dictionnaire Annamite-Français, Saigon, 1898.

Jean Bonet, Dictionnaire Annamite-Français (Langue officielle et langue vulgaire), 2 vols., Paris, 1899.

Hội Khai-trí Tiên-dức, Việt-nam Tự-diện, Hanoi, 1931.

Đào-Duy-Anh, Hán-việt Tự-diện, Hanoi, 1931.

B. Karlgren, Analytic Dictionary of Chinese and Sino-Japanese, Paris, 1923.

単行本

国書刊行会、近藤正斎全集、第一冊、東京、明治三十八年(1905)。

松本信広教授、印度支那の民族と文化、東京、昭和十七年(1942)。

石田幹之助教授、南海に関する支那史料、東京、昭和二十年(1945)。

徐松石、泰族僮族粵族考、上海、民国三十五年(1946)。

董同龢、中国語音史、現代国民基本知識叢書、第二輯、台北、民国四十二年(1953)。

杉本直治郎教授、東南アジア研究、I、東京、昭和三十一年(1956)。

商務印書館編、辞源、民国四十六年(1957)、台北。

羅常培、漢語音韻學導論、北京、民国五十一年(1962)。

教育部國語推行委員會編、中華新韻、台北、民国五十二年(1963)。

周德清原著、許世瑛校訂、劉德智注音、音注中原音韻、台北、民国五十三年(1964)。

高本漢著、趙元任、李方桂會訳、中国音韻學研究、台北、商務印書館、民国五十一年(1962)。

論文

羅雨亭(根沢)、慎懋賞本慎子弁偽、古史弁、第四冊、下編、p. 625-637.

同上、慎懋賞慎子伝疏証、古史弁、第四冊、下編、p. 638-646.

神田喜一郎教授、明の四夷館に就て、史林、第十二卷、四号、p. 1-16. 昭和二年(1927)。

石田幹之助教授、女真語研究の新資料、桑原博士還曆紀念東洋史論叢、p. 1271-1328、昭和六年 (1931)。
伊波普猷、日本館訳語を紹介す 方言、卷二、九号、p. 41-67、昭和七年 (1932)。

秋山謙蔵、明代に於ける支那人の日本語研究、国語と国文学、第十卷、一号、p. 1-38、昭和八年 (1933)。

山本達郎教授、華夷訳語に見えたる百夷及び八百の文字、東方学報、東京、第六冊、昭和十一年 (1936)。

浅井恵倫教授、校本日本訳語、安藤教授還曆祝賀紀念論文集、p. 3-56、昭和十五年 (1940)。

小倉進平、朝鮮館訳語訳、東洋学報、卷二十八、p. 361-421, 511-576、昭和十六年 (1941)。

田坂興道、同回館訳語訳、東洋学報、卷三十、p. 96-131, 232-296, 534-560、昭和十八年 (1943)。

同上、「同回館訳語訳」補正、東洋学報、卷三十三、第三一四号、p. 132-145、昭和廿六年 (1951)。

木下李太郎、安南語の系譜、文芸春秋、第十九卷、九月号、昭和十六年 (1941)。

最近に於ける四夷館及び華夷訳語の研究、東洋学報、第三十三卷、第三一四号、p. 145-147

白鳥芳郎、南詔、大理の住民と爨、樊、羅羅、民家族との関係、雲南の蛮族、鳥蛮と白蛮について、民族学研究、第十七卷、第三一

四号、p. 45-72、昭和廿八年 (1953)。

陳荆和、字喃之形態及其產生年代、人文科学論叢、第一輯、p. 303-330、民国三十八年 (1949)、台北。

同上、交趾名称考、国立台湾大学文史哲学報、第四期、p. 79-130、民国四十一年 (1952)。

同上、安南訳語考釈(上)(下)、文史哲学報、第五期、p. 149-240; 第六期、p. 161-227、民国四十二—四十四年 (1953-54)。

陳育崧、椰陰読書記、南洋学報、第十卷、第一輯、p. 55-58, 1954

許雲樵、「華夷訳語」伝本攷、南洋学報、第十卷、第二輯、p. 11-16, 1954。

聞宥、論字喃之組織及其与漢字之関渉、燕京学報、第十四期、民国二十二年 (1933)。

書 目

朱睦㮮、万卷堂家藏芸文目、隆慶庚午年 (1570)。(北京図書館善本書号 1327)。

晁瑬、晁氏宝文堂分類書目 (同 1328)。

無名氏、内閣書目 (同 1329)。

錢謙益、牧齋書目 (同 1323)。

黃虞稷、千頃堂書目（同 1283）。

張鈞衡、適園藏書志、卷八、子部三、雜家類。

楊守敬、日本訪書志、卷六。

史料

漢班固撰、唐顏師古注、漢書、卷廿四地理志、卷一一六、南蠻伝。

宋范曄撰、唐章懷太子注、後漢書、卷五四、馬援伝。

唐姚思廉等奉勅撰、梁書、卷三。

唐魏徵等奉勅撰、隋書、卷五十三。

宋范成大、桂海虞衡志、淳熙二年（1175）。

宋周去非、嶺外代答、淳熙五年（1178）、卷二、外國門、卷四、俗字条。

宋趙汝适、諸蕃志、宝慶元年（1225）、卷上、交趾国。

元汪大淵、島夷誌略、交趾条、須文那条。

藤田豐八、島夷誌略校注、国学叢刊、民国四年（1915）。

黎則、安南志略、順化大学越南史料編訳委員会校訂本、卷一、風俗条、卷七、漢交州、九真、日南刺史太守、附三国時刺史、卷八、

六朝交州刺史都督、卷九、唐安南都護、經略使。

陳剛中（孚）、陳剛中詩集三卷附錄一卷（鈔本）（北京圖書館善本書号 1480）。

同上、同上、（同上 1481）。

同上、同上、（託跋廬叢刊第七冊）。

慎懋官、華夷花木鳥獸珍玩考、十二卷、万曆刊本、（北京圖書館善本書号 1604）。

慎懋賞、四夷広記、玄覽堂叢書統集、民国三十六年（1947）。

同上、慎子内外篇附逸文校勘記、四部叢刊子部、民国九年（1920）。

中国学会、慎子三種、民国二十年（1931）。

茅伯符（瑞徵）、皇明象胥錄、八卷、崇禎二年（1629）。

陳仁錫、潛確居類書、崇禎三十五年(1630-32)刊。卷十三、安南條。

黎貴惇、雲台類語、卷六、音字條。

清張廷玉等奉勅撰、明史、卷二一八、王錫爵傳。

吳士連等撰、大越史記全書(引田利章、1885年刊本)。外紀、卷一、貉竜君、雄王條、卷五、屬隋唐紀、

本紀、卷一、前黎紀、卷三、四、李紀、卷五、六、七、陳紀。

潘清簡等奉勅撰、欽定越史通鑑綱目(1859年撰成、1884年印行)、前編、卷二、卷四。

潘輝注、歷朝憲章類誌、卷四十二—四十五、文籍志。

指南玉音解義、景興二十二年(1761)年刊本。

呂維祺修、曹溶補、四詠館則、京都大學 1928年刊本。

王宗載修、四夷館考(自序萬曆八年 1580、羅振玉跋文光緒三十四年 1908)。

向達、瀛涯瑣志—記巴黎本王宗載四夷館考—圖書季刊、新第二卷第二期、1940年七月、p. 181-186。

江蘩、四詠館考、十卷、康熙三十四年(1695)刊。

羅振玉、江蘩四詠館考十卷、梁谿顧氏讀書齋藏原刊本跋、(大雲書房藏書題識卷二所收)。

追 補

Paul K. Benedict, Thai, Kadai, and Indonesian: A new alignment in Southeastern Asia, American Anthropologist, New Series, vol. 44, Oct.-Dec. 1942, pp. 576-601.

J. H. Greenberg, Historical linguistics and unwritten languages, Anthropology Today, pp. 282-283.

André-G. Haudricourt, L'écriture et les langues (L'Indochine), dans "Ethnologie de l'Union Française", t. II, Asie-Océanie-Amérique, édité par André Leroi-Gourhan et Jean Poirier, Presses Universitaires de France, 1953, pp. 524-537.

H. Maspéro, Etudes d'histoire d'Annam, I, La dynastie des Lý antérieurs, BEFFEO, t. XVI, No 1, pp. 1-48, 1916.

W. Eberhard, Kultur und Siedlung der Landvolker Chinas, T'oung-pao, Supplement to vol. 36, pp. 371-372, 1942.

Inez de Beaclair, The Khlao of Kueichow and their history according to the Chinese records, Studia Serica, vol.

X, pp. 26-27, 44, 1946.

A. Bonifacy, Etude sur les langues parlées par les populations de la Haute Rivière Claire, pp. 317-318, 1905.

E. Lunet de Lajonquière, Ethnologie du Tonkin septentrional, pp. 356-357, 1906.

P. Pelliot, Le Hoja et le Sayyid Housain de l'Histoire des Ming, Appendice III, Le Sseu-yi-kouan et le Houei-tong-kouan: 1. Le Sseu-yi-kouan (pp. 207-249); 2. Le Houei-tong-kouan (pp. 249-272); 3. Les Houa yi yi yu et autres vocabulaires polygrottes (pp. 272-290):

i) Le Houa yi yi yu de Houo Yuan-kie; ii) Les Houa yi yi yu de Sseu-yi kouan; iii) Les Houa yi yi yu de Houei-tong-kouan; iv) Les vocabulaires de K'ien-long; v) Quelques vocabulaires indépendants des Ming.

T'oung-pao, vol. XXXVIII, 1948, pp. 81-292.

Lewicki Marian, La langue mongole des transcriptions chinoises du XIV^e siècle, le Hua yi yi yu de 1389, édition critique, précédée des observations philologiques et accompagnée de la reproduction photographique du texte, Breslau, 1949.

羅香林、百越源流与文化、中華叢書委員會印行、民國四十四年。

芮逸夫、僚(獠)為仡佬(猺猪)試証、歷史語言研究所集刊第二十本上冊、p. 343-356、民國三十七年。

芮逸夫、僚人考、歷史語言研究所集刊第二十八本。慶祝胡適先生六十五歲論文集、p. 727-770、民國四十五年。

芮逸夫、仡佬的族屬問題、中央研究院刊第三輯、丁故總幹事文江逝世廿週年紀念刊、p. 269-309、民國四十五年。

松本信広教授、古代インドシナ稲作民宗教思想の研究—古銅鼓の文様を通じて見たる—インドシナ研究、東南アジア稲作民族文化綜合調査報告(一)、p. 3-160、1965年。

山崎忠、甲種本華夷訳語語訳(一)、アジア言語研究、卷一、p. 30-39、1951年